



写真 3-35 旧観音寺 南面と西面



写真 3-36 旧観音寺 西面と北面



写真 3-37 遍照寺の石垣



写真 3-38 大型の玉石

石を積み上げた井戸であり、内部構造は不明であるが新しそうである。

3) 大型の玉石 + 隅部は結晶片岩の石積み

一抱え以上を有する角張った玉石を野面に積み上げ、隅部は結晶片岩の細長い石取りの部材の長手部分を交互に違えて積み上げた石垣で、舟戸から中心路である中通（榎尾道）に至るある程度広い道に面した部分にみられる。

4) 小型の玉石 + 隅部は結晶片岩の石積み

人頭大位で角張った玉石を野面に積み、隅部は結晶片岩の細長い石取りの部材の長手部分を交互に違えて積み上げた石垣で、全般の地域においてよくみられる。

5) 小型の玉石積み



写真 3-39 4) と 5) の接合部



写真 3-40 複合事例

やや長径で丸みをもった小型の玉石を全体に積み上げたり、長径の玉石を1段毎に横目地を通して、その斜め方向については1段毎に左右交互に積み、その目地にはモルタルを詰めている場合が多く新しい工法になるもので地域全般に広くみられるが、4)より少し新しい構造と考えられる。

6)間知石積み

見附部分を正方形に加工した砂岩製石材やコンクリート製部材を水平や斜めに目地を通して積み上げた石積みで、現在の施工になるものである。

(8) その他の装飾等

建築物や工作物の一部には次のような各種の装飾を施した部材が見られ、特色ある建築空間や都市の景観を創り出すとともに、ユーモラスで心豊かな雰囲気醸し出す効果を演出し、往時の心温まる九度山人の意気込みを感じることができよう。

1)鍾馗像

瓦製の立体的な鍾馗像で、魔除けとして各所に取り付けられている。

ア、軒下の部分に取り付けるもの

イ、鬼瓦のそば・大棟熨斗積みに設置されるもの
ウ、鬼瓦の鬼面そのものの図柄とするもの

2)金太郎像

ア、米金（旧河原医院）

中通（槇尾道）中央部の河原家住宅主屋（ツシ2階建・入母屋造・正面庇付・大型の町屋・大正頃の建築）の正面庇の軒下中央部に設置されている。高さは2mを超す大型の陶製金太郎像で、立てた米俵に坐し左手をあげ右手を脇に抱え込む。

九度山町並のほぼ中央部に位置し、正面庇の軒下に北面して設置されている。彩色された非常に大型で特異な陶製の像で、町並のシンボルとして親しまれている貴重な遺産である。

陶芸家 井端莊平の作品（明治10年～大正9年、橋本市高野口町名古屋出身）、九度山東山に工房を営み、大正4年（1915）頃この像を制作、動物・仏像・壺・茶器等を作成、那智山で

客死

イ、鬼瓦の鬼面意匠

「中組」路地裏の小規模な倉庫(?)の大棟の瓦製の鬼面に用いられているもので、非常に立体的で米俵を担いだ立像で金太郎の小像、ユーモラスな図柄である。

3)鰻絵等

漆喰で各種の文様を盛り上げて化粧するもの

ア、陰盛 鬼瓦の周りに漆喰を大きく盛り付け、巨大な鬼面を造り出す

イ、大棟熨斗積みの両端部部分に漆喰を厚く塗り上げ、この立面に唐草等の文様を立体的に造り出し、化粧する

ウ、塗り込め破風板尻に、唐草等の文様を造り出す

エ、軒下隔壁部分の隅棟の飾り

4)塗装等の化粧

ア、「千代ヶ丘」の河原家（現在取壊されている）

多くの建物を構え、通りに面した古い建物（江戸時代と明治の初め頃と考えられる）は元は宿屋であったと考えられる2階建等の建物で、その柱・桁・建具・軒部材には「弁柄塗り」が数度にわたって塗装された痕跡が見られる。

古い町並等においては、一般的に少し傷んだ状況にあることからくすんだ・汚れた雰囲気に感じられがちである。しかし詳しく調べてみると元は現在見られるような風蝕等によるくすんだ・汚れた色調ではなく、当家の建物は元々は艶やかなベンガラ色に塗られていたことが判明する。

この地は上記において考察してきたように大勢の人々が往来し物資輸送の基地として経済的にも大きく発展してきた町であり、詳しく調べてみると他にも多くの弁柄塗りの建物が見つかるであろうし、他に多くの装飾を発見することができよう。

イ、「舟戸」の萱野家

正面の洋館は町内で唯一の擬洋風（木造・半寄棟造・大正頃の建築カ）の建物で、急勾配の屋根・



写真 3-41 鍾馗 1 ア



写真 3-45 鍾馗 5 ウ



写真 3-42 鍾馗 2 イ



写真 3-46 米金の正側面



写真 3-43 鍾馗 3 イ



写真 3-47 金太郎像



写真 3-44 鍾馗 4 イ



写真 3-48 金太郎像 2



写真 3-49 鬼の影盛・大棟熨斗積の鰻絵（唐草文）・軒裏塗込



写真 3-53 塗籠・鰻絵



写真 3-50 鰻絵 詳細



写真 3-54 鰻絵 紋章



写真 3-51 鰻絵 軒下の化粧鬼



写真 3-55 塗籠・鰻絵



写真 3-52 鰻絵 家紋



写真 3-56 虫籠窓・家紋



写真 3-57 塗籠・鍔絵



写真 3-61 虫籠窓 妻に設置（煙出し）



写真 3-58 虫籠窓 連続

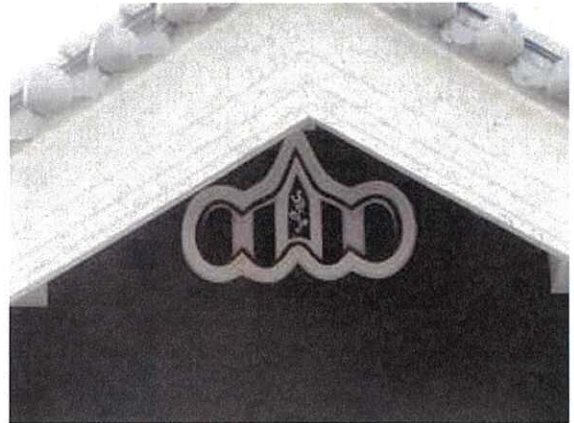


写真 3-62 虫籠窓 妻に設置（煙出し）



写真 3-59 虫籠窓



写真 3-63 ツシ 格子窓塗装



写真 3-60 虫籠窓



写真 3-64 ツシ 格子窓

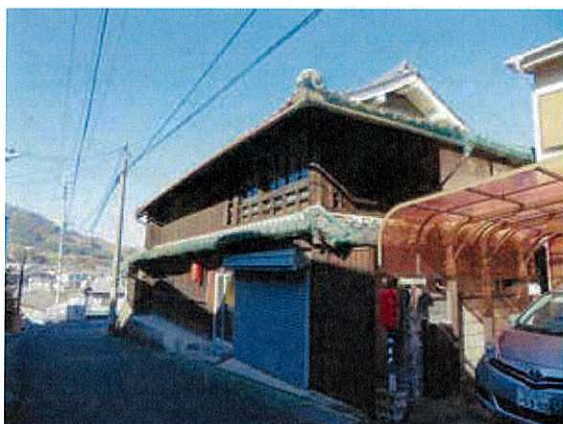


写真 3-65 弁柄塗装 1



写真 3-69 擬洋風 1

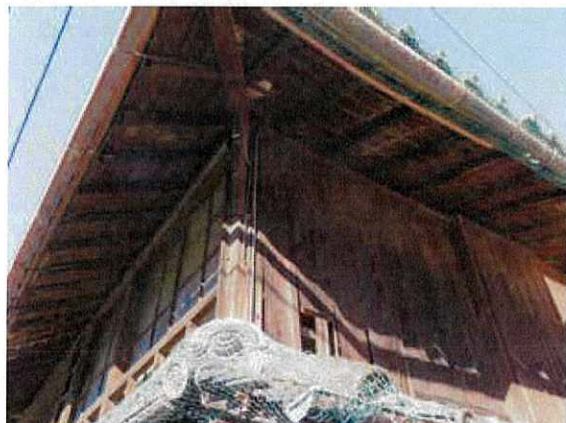


写真 3-66 弁柄塗装 2



写真 3-70 擬洋風 2

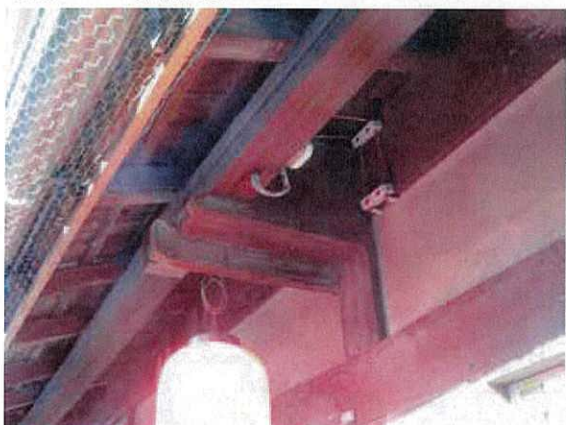


写真 3-67 弁柄塗装 3



写真 3-71 出窓飾



写真 3-68 弁柄塗装 4



写真 3-72 玄関出窓飾 石造大型化粧石

褐色系スペイン風の瓦・赤茶色系の壁塗装等洋風の要素が多い。よくみると、軒下の木製格子戸・漆喰壁等和風の要素も併用され、内部の造りは和風のようなものである。

ウ、「千代ヶ丘」の佐田家

店舗は中通りに面し木造・2階建・切妻造で大正から昭和初めころの建築と考えられ、1階正面の出窓の下部には巨大な花崗岩製の板を嵌め込み店舗の正面を豪華に化粧している。

等々その他、数え切れないほど各種の工夫を凝らした特色ある建物群が存在している。

5)井戸

人間が生活していくうえで必ず必要とするものは水の確保である。九度山のような人口密度が高く都市景観を呈する地域でなおかつ特に高い岩盤上に営まれた集落にあってはなおさらその確保については死活問題であったに違いない。

管見のうちで九度山における井戸の設置についての史料は確認できておらず、また井戸の構造・設置場所等についての調査を行っていないが、外観調査の折に目に付いたことに記してみる。

町並の北部となる中通（槇尾道）付近にあっては結晶片岩の岩盤が東西に大きく伸びその頂部に大きな都市集落が発展している自然環境からして、地下の湧水を確保することは非常に困難であり岩盤上に降った天水が岩盤の裂け目を伝って集まり岩盤の変曲点等において湧き出した水をいったん井戸に集めて利用せざるを得なかったであろう。

この調査の折、数十カ所の井戸（外観のみ）を目にしたのでその概要について記してみる。

中通の北斜面に多くの露天の井戸（地形環境からみて各家ごとに設置されたものではなく、近隣の相当な戸数ごとに利用した共同井戸であったと想定している）が確認できた。

岩盤の一部から湧き出したり染み出た水を溜めたもの、その水の周りに玉石等により低い井戸枠を築くものがほとんどであった。少し平坦な部分にあっては地上に数尺の高さで石製や現在ではモ

ルタル等で化粧した井戸枠を組み上げている。

「中通」の南斜面の裾においては砂利の堆積層が相当存在しており、外観調査の折には井戸はほとんど確認されず、更にその南の「南通」の周辺においても同様であった。これらのことからこの堆積層には相当の地下水が流れており各家ごとに井戸を設けることができたのであろうと考えられた。

いずれにしても、聞き取り調査・各戸調査を実施していないので正確な状況は不明であり、やは



写真 3-73 井戸 1



写真 3-74 井戸 2



写真 3-75 井戸 3



写真 3-76 井戸 4



写真 3-77 井戸 5



写真 3-78 井戸 6



写真 3-79 井戸 7

り岩盤とその天水の流れ道の状況により異なってくるであろう。

6) 真田の抜け穴等

現在「真田の抜け穴」と称されている遺構は、桃園地区の「中通」から「南通」への分岐点を南西方向へ急勾配の坂道をほぼ降りきった東側に、結晶片岩を組み上げられた南北約7.6m・東西約1.9m・深さ約2.0mの石組みの穴が存在する。伝承ではこの穴は北側の結晶片岩岩盤を削り抜き紀の川の真田淵まで続いており、真田幸村が大坂城の陣に先立ちこの抜け穴を利用し隠密裏に大坂城へ駆けつけたと伝えられている。

しかしこの穴は古墳時代後期の横穴式石室の古墳で、その墳丘と玄室部分の天井石が欠失した遺構で南側の地下には更に羨道部分が続いている遺跡であり、真田との関連性はなく近年において伝承されてきたようである。

このことについては、江戸時代後期に編纂され



写真 3-80 真田古墳 1



写真 3-81 真田古墳 2

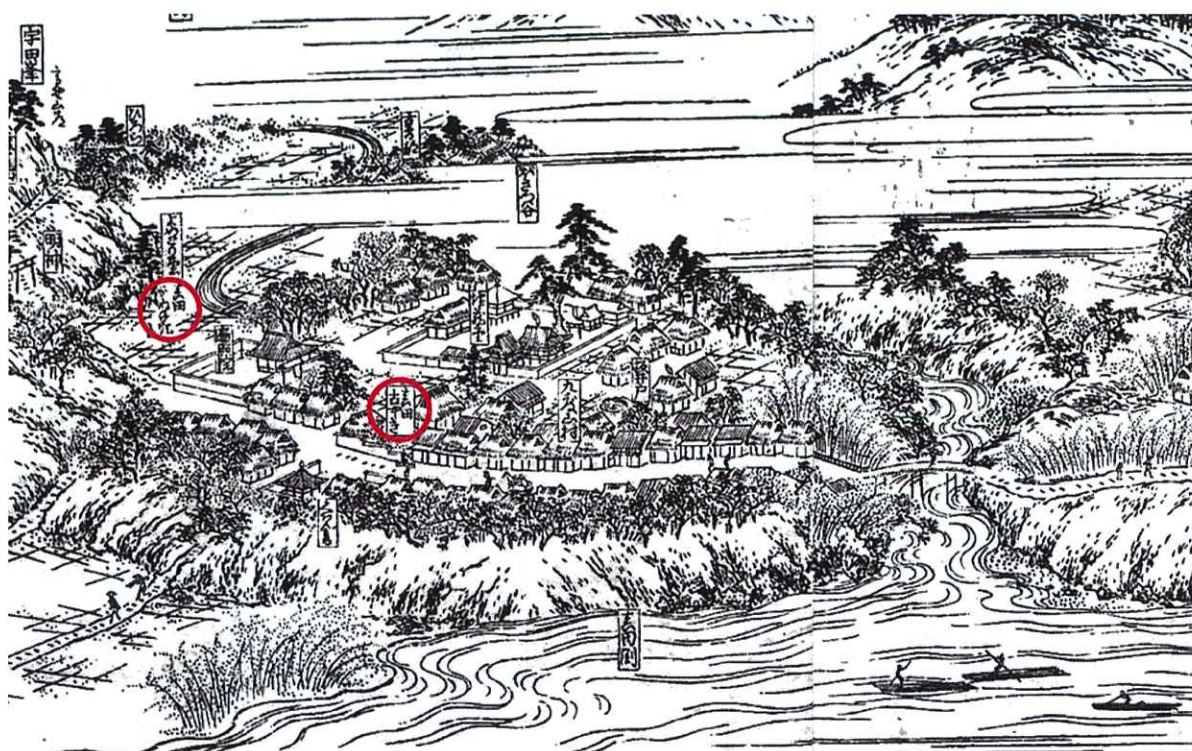


図3-10 紀伊国名所図会に描かれた「真田ぬけ穴」・「真田古やしき」

た『紀伊国名所図会』巻の三に掲載されている「入郷・九度山」の図にはこの地域を俯瞰した景観が詳しく記されている。この図の東端には九度山地区の総産土神社である『榎尾山明神社』が描かれその西に接して高野山へ続く「高野山道」（榎尾道）と注記されその西方の低地部分に「真田ぬけ穴」と注記された穴状の石組みらしいものが描かれているがその詳細については不明であり本文においても記載はない。

当時の江戸時代後期においても既に上記の大坂城への「抜け穴」の伝承が大きく流布されていたからであろう。

この地点は『榎尾山明神社』（創建は平安時代とされている）を起点に考えると、現九度山中学校グラウンドの中央付近で地下相当深い位置と考えられる。戦後新制九度山中学校の創立にあたり旧明神社の境内敷地を譲り受け大きく埋め立てを行い開校されたものであり、「旧抜け穴」が見られなくなるため真田古墳の石室を「新抜け穴」として伝承されてきたのではないかとと思われる。

また同図には善名儒院（旧名「地藏堂」、真田

庵）も描かれておりこの寺は寛保元年（1741）に旧真田屋敷跡に創建されたとしているが、同図には現在地の北西部で「中通」（榎尾道）の南に接した地点（旧観音寺跡の向い側辺り）に『真田古やしき』との注記がなされており、現在の境内地と伝えられていた「旧屋敷地」とは相当の距離で離れている情景が描かれており、混雑がみられる。

7) 看板建築

ある程度古い建築物において建築された当初の形をそのまま現在にまで残されていると言うことはなく、その時々要望により大小・各種のそれぞれの改造・改修が行われ現在の生活に活かされているため、現在にまで残されてきているのである。

今回の外観調査により特に時代区分については、(i) 明治時代以前のもの、(ii) 大正時代から太平洋戦争までのもの、現時点での外見からみて (iii) 戦後の建築になり九度山における古くからの構造・様式になるもの、(iv) 戦後の建築になるもので古くからの構造・様式によらないものであっても、現地においては各時代の要請により改造さ

れた各様式が混在している。

外観の化粧部分—看板・パラペット・外壁の新しい化粧・新しい屋根等は良く眼について新しいものと感じられるが、ここで少し他の部分に眼を凝らしてみると、古い構造部材・旧の屋根部分・左右の両側面・背面・屋根全体・部材の風蝕状況等を垣間見ることができこれらの総合的な判断から当該建築物の本当の姿を知ることができる。

このことにより当時の外観やその周りの景観を知ることができる貴重な資料となるものですが、その所有者・居住されている人・周りの関係する方々にとっては全くその関係するデータ・価値を

知らされていないのが現状であり、関係者の方々の“思い入れ”や“その決断”によりかろうじて今に伝えられているのです。

その事例として、神明地区の『三平薬局』建物は、正面の外観は新建材の外壁・アルミ製建具と大きな看板等で全て覆われているため、一般的には現代の建築であろうと思われる可能性が大きいと思います。しかし詳しく観察してみると見えるごく一部に古い材料が覗かれ全体として古いものであると判明しとりあえず「大正時代」頃と考えられますが、側面や町営駐車場から観察してみると屋根は本瓦葺という個人住宅では非常に珍



写真 3-82 看板建築 1-1



写真 3-85 看板建築 2-2



写真 3-83 看板建築 1-2



写真 3-86 看板建築 3-1



写真 3-84 看板建築 2-1



写真 3-87 看板建築 3-2

しい屋根葺きの状況がよく残され、側面のごく一部には大きな風蝕のある軒の部材が観察できることから、本体部分の建築は明治時代にまで遡る可能性は大いにあると考えています。

このような建築を一般的に“看板建築”と呼んでおり、町内にはこのような事例が多く残されています。

8) 織物工場建築

この地域において旧織物工場に關すると考えられる建物が少なからず残されているが、現在では全てその機能は停止され織機類は全て撤去され空き家や倉庫としてかろうじて残されている。

この織物産業についても全く調査・研究をしていないが、やはり川向かいの旧高野口町（橋本市高野口町）を中心とした地場産業であった『パイル織物』等に関連したものであったとみられる。織物産業について歴史的に観れば、江戸時代から伊都地方で大いに栄えた『川上木綿』にルーツを持っていると思われる。

県内においても昭和の初期頃までは、近代産業

を最も支えていたのはこの繊維産業であったとされ、九度山においてもこの織物産業は昭和40年代頃まで稼働していたとみられる。

外観の調査のみであるが織物工場建築であろうと判断したのは、大きな空間の建築とし・内部にはほとんど柱を立てず・外壁は大きな開口部を設け・そこにガラス戸の引き違い建具を入れ・織物建築独特の設備として窓の下辺に朝顔状の集塵受



写真 3-90 織物建築 3

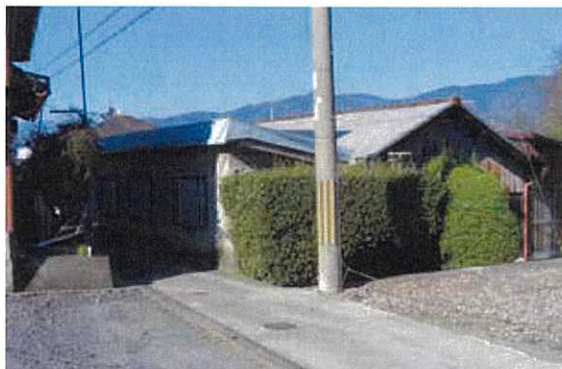


写真 3-88 織物建築 1



写真 3-91 織物建築 4



写真 3-89 織物建築 2



写真 3-92 織物建築 5 鋸屋根

けを設けているなどを基準として選定した。

更に外見上鋸屋根とし北側の壁面にはガラス戸を入れ北からの採光を重視した工場建築遺構は盛栄地区に1例残存しているが、周りの状況からみて、これも織物建築と考えられる。

9) 社寺・小祠

九度山の町並内には大きな社寺として宗教法人格を有しているのは、遍照寺と善名稱院（真田庵）の2箇所のみであり、法人格は持っていないが社寺の景観を保持しているのが槇尾山明神社と不動院（里坊）で、屋敷神を除いた『祠』的なものと



写真 3-93 遍照寺と不動院 遠景 東から



写真 3-94 右・遍照寺 左・不動院



写真 3-95 遍照寺 正面

して聖法院（東一地区）・稲荷社（稲荷地区）・地藏堂（舟戸地区）・弁財天堂（徹水洞堰堤の際）がみられる。

これらは大小の規模にかかわらず都市空間や景観を構成する重要な施設であることから、その概要を記してみる。

① 遍照寺

この寺の歴史については古い記録が伝わっており、九度山地域の総産土神社である『槇尾山明神社』の別当寺であり古くから当神社境内に所在したが、江戸時代



写真 3-96 遍照寺 境内



写真 3-97 遍照寺 本堂



写真 3-98 遍照寺 石造群

前期の貞享3年（1686）〔又は室町時代前期頃であったとも伝えられている〕に火災で焼失したため、現在の地へ移転したと伝えられている。

その後、当地に所在した『観音寺』と『我覚寺』を合併しその法燈を継ぎながら現在に至っているという。

現在は中通一中部の東端の南に位置し丹生川右岸の崖に臨み、傾斜地に築かれた東西に細長い境内の東端に本堂・その西に庫裡・西端に表門・その北に鐘楼を構える。

本堂は桁行三間・梁間三間・入母屋造・正面一間向拝付・棧瓦葺の建造物で、内陣は横長の三間造付の厨子を構えその中央に遍照寺・左右に我覚寺と観音寺の本尊等を祀っている。中央間の厨子は江戸時代中期（17世紀後期頃）・左右の厨子は明治時代中頃で中央部の擬古作であり、その併合の歴史を示しているようである。表門は一間薬医門で江戸時代後期頃、鐘楼は一間四方で江戸時代後期から明治時代頃の建築で、全体として優れた寺観を残している。南側土堀下方の石垣は大きな結晶片岩で積まれた古い構造を残しており、この

地が真田屋敷の跡であるとの説も伝えられている。

②善名稱院（通称真田庵）

この寺の歴史については、地元出身の大安上人が寛保元年（1741）に真田昌幸・幸村の屋敷地であった跡地に地藏菩薩を本尊とする寺を創建したといい、本尊にちなみ『地藏堂』ともいわれていた。境内地中央に本堂（県指定）・南に長屋門



写真 3-101 本堂 南東隅



写真 3-99 真田庵 本堂

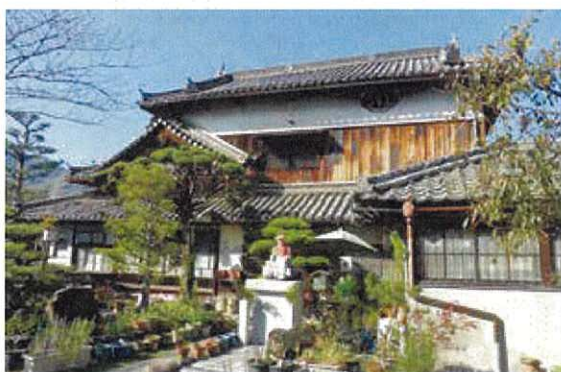


写真 3-102 本堂 東側面



写真 3-100 本堂 雪景色



写真 3-103 本堂 西側面

(町指定)・その北東に大安上人廟所(県指定)と土砂堂(県指定)・その北に位牌堂(町指定)・境内北端に北門(町指定)等を構える結構大きな寺院である。

ア、本堂

この建物は南方の「本堂部分」と中央の「繋ぎの間部分」と北方の「庫裡部分」の三つの機能を1棟に「工」の字状の平面に融合させた複合建築

である。本堂部分は東西に長く西半分を内陣とし本尊は内陣奥に南向きに安置し、僧侶は北面して作法する。外陣は南北に長く礼拝者は西面して北西方向の本尊を斜めに拝むこととなる。

中央部分の繋ぎの間は礼拝者の玄関・控えの間とし、北部は庫裡部分とし台所部分の竈からの排煙は最上階の側面から虫籠窓を煙出しとし、全てを土壁で塗籠めた「煙道」とし木造部分を露出さ

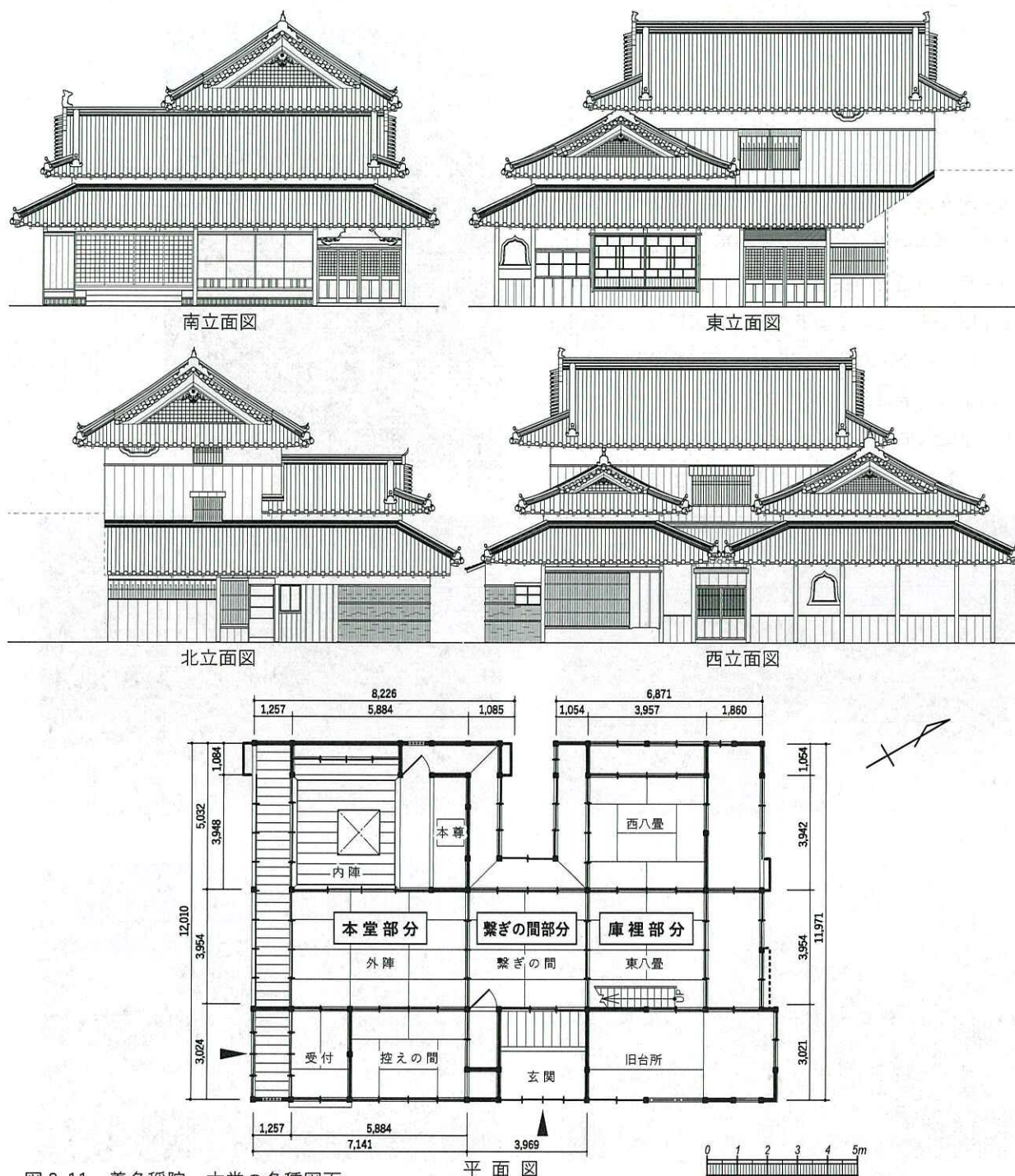


図 3-11 善名稱院 本堂の各種図面

せず防火に備えている。

さらに本堂部分は東西棟の入母屋造で平屋建とし、北の「繋ぎの間」と「庫裡」の部分は1階はその機能とし、その上の階には大きな一室とした吹き抜けの2階及び3階建の物置を造り出し、共通した南北棟の大きな入母屋造とし、大棟は本堂部分と直交し全て本瓦葺としている。

またそれぞれには多くの千鳥破風を付加した豪華で複雑な他に類例のない本堂建築で、建築彫刻の様式と鬼瓦の刻銘からみて、安政3年(1856)から4年にかけて造営されたことは明らかである。
イ、大安上人廟所覆屋



写真 3-104 廟所 正側面



写真 3-105 土砂堂 正面



写真 3-106 長屋門 背側面

大安上人は安永2年(1773)に亡くなりこの廟所に葬りその覆屋として建てられたもので、正面一間・側面二間・入母屋造・妻入の小規模な建物で、様式と古記録から安永年間に建てられたことが明らかである。室内中央に石室があり須弥壇を置きその上に絢爛豪華な多宝小塔を祀っている。

この堂の建築年代は古記録と絵様からみて安永3年(1773)に完成した堂であることが明らかであり他に類例のない非常に特殊な建物である。

これらの埋葬形態は古記録に記されたとおりで、高野山奥の院の弘法大師の御廟と金剛峯寺本坊北の高台に葬られた真然大徳廟に通じる埋葬・多宝塔・覆屋という真言宗初期の埋葬形式を遺している。

ウ、土砂堂

この堂は弥勒菩薩を本尊とする小規模な三間堂であるが、室内には大きな多くの桶にきれいな岩を一杯に入れ「土砂加持」の作法を行う特殊な堂である。建築絵様と化粧銅板の刻銘から建築年代は明和9年(1772)で、上人の信仰形態を伝える遺構である。



写真 3-107 長屋門 正側面



写真 3-108 位牌堂

エ、その他

長屋門は境内南西隅に建つ細長い建物で東端を馬道（通路）とし参拝の通路で、様式と古記録からみて安政3年（1856）の再建である。

位牌堂はツシ2階で正面に庇をつけ外壁は土で塗籠め多くの位牌祀る江戸時代末期の建物であるが、元の用途は不明である。

北門は境内を限る北土塀に開かれた一間薬医門で、南西隅の屋根隅蓋にはユーモラスな親子の獅子が飾られた江戸時代末期の門で、それぞれの建物は境内の景観を保持するものである。

③榎尾山明神社（社殿は国登録有形文化財、神像は県指定文化財）

この神社は九度山地区の総産土神社に当たり大いに崇敬を集めていたが明治38年の神社合祀令により慈尊院の丹生官省符神社へ合祀されたが、現在もなお地区全体で祭や社殿を含めきれいに維持・継承されている。

僧空海が朝廷から土地を賜った際の「御朱印縁

起」に記された『榎尾』の地点は当社を示しているとされその重要性を伺うことができ、弁財天を勧請した後も修業のため月に9度下山されたため、『九度山』の名が付いたともされ、高野山と深く繋がちながら発展してきた。

このため高野山の社殿形式がそのまま受け継がれ、本殿は極めて大型の一間社春日造で記録は残されていないが建築様式から江戸時代前期の建立になるものである。ちなみに日本最大の春日造社殿は重要文化財金剛峯寺山王院本殿（2棟）、次いで重要文化財丹生都比売神社本殿（4棟）が遺され当社殿はこれに次ぐ非常に大きな規模である。

また摂社の弁財天社は一回り小規模であるものの他と比べて圧倒的な規模を誇っており、様式からみて16世紀にまで遡り得る社殿である。

社殿には平安時代後期の木造男神立像（高野明神）と少し時代が降る木造男神坐像（白髭明神）が伝わり、その歴史を物語っている。

④不動院（旧萱野家住宅）



写真 3-109 北門



写真 3-111 榎尾山明神社 秋祭り



写真 3-110 北門留蓋 親子の獅子



写真 3-112 榎尾山明神社



写真 3-113 明神社 摂社・本殿



写真 3-117 背側面 摂社・本殿



写真 3-114 明神社 本殿



写真 3-118 不動院 南面



写真 3-115 本殿



写真 3-119 不動院 正面



写真 3-116 摂社



写真 3-120 不動院 本堂（旧萱野家 主屋）

高野山はほぼ1000m近い山中にあり冬季は非常に冷え込み修業にさえ厳しい環境にあるため、山上寺院においては山下の地に冬期の避寒地として営まれたのが『里坊』であるが、詳しいことは判明していない。町史において明和2年（1765）に本堂（主屋）・客殿・土蔵・表門等が造営された折の棟札が伝わり、その建物が現在に伝わっているとしている。

萱野家は里坊の管理者であった。大石順教尼は両手を失した障害者でありながら書・和歌・絵画等の諸芸に優れていたため支援を続けた。現在は九度山町が不動産等を購入すると共に町指定文化財として指定を行い、大石記念館としてその作品

類を展示する施設として公開・活用している。

⑤その他

聖法院・稻荷社・地藏堂・弁財天堂のみ掲載する。



写真 3-121 聖法院



写真 3-125 舟戸 地藏尊



写真 3-122 稻荷社 1



写真 3-126 轍水洞 弁財天堂



写真 3-123 稻荷社 2



写真 3-127 轍水洞 弁財天尊

10)近代建築

建築においても幕末から構造・意匠共に近代化が始まるが、九度山にはこの時期の建物は残されていない。明治時代の中頃から外見を洋風に似せて木造で和風の技術で建築された『擬洋風』と呼ばれる建築が建てられはじめるが、町内においても唯一の事例が残されている。

戦後もすでに80年を過ぎ歴史の位置付けも大きく変遷しているなかで、時代区分（iv）で述べた



写真 3-128 擬洋風建築 南東



写真 3-129 擬洋風建築 南西



写真 3-130 近代建築 中通・西端

通り（35頁）戦後の建物であってもこの町並にしっかりと根付いていると考えられるものにあっては“町あるき”を楽しませてくれる資源となりえるものであり、その一例を紹介してみたい。

11)修復・活用事例

中通一西部に記載している自主的な修復の遺構を活用

第1章の末尾（10頁）で述べたように、町並みの一部についてはすでに個人等により適宜な維持・



写真 3-131 鉄筋コンクリート造+洗出 中通・中部



写真 3-132 土塀洗出 中通・中部



写真 3-133 テラカッタの化粧 南通・西部

管理や更に進んで積極的な補修・修景が行われ積極的に利用・活用されている事例が多く観られる。更に一部については行政による公有化と整備・公開の工事が実施され大きな成果をあげている事例もあるが、町並み全体から見ればまだまだほんの一部であり、今後住民と行政が一体となりこの九度山の町の良さを活かした“まちづくり”がすすむことを願っている。



写真 3-134 松山記念館



写真 3-135 中通 2 軒 修復



写真 3-136 中通 青木家 修復



写真 3-137 小澤家 修復 1



写真 3-138 小澤家 修復 2



写真 3-139 小澤家 修復 3



写真 3-140 中川旅館 活用



写真 3-141 おやすみ処・真田茶屋 活用



写真 3-142 玉川亭 活用



写真 3-143 幸村そば 整備・活用



写真 3-144 中通 活用

4 節 古絵図等に描かれた九度山の川湊と町並

筆者は日本建築史を専門分野としており、歴史や絵画が専門ではなくこの川湊・町並の状況を記した史料や古絵図の網羅したデータは持ち合わせが少なくその消長についても不明な事項が多くあるが、古絵図に描かれた視覚的な要素から川湊と町並の概要を探ってみることとする。

このため本稿における古絵図史料からの検討においては、前述のとおり実物の絵画史料を実見したのではなく、次の刊本一日野西眞定編集の『高野山古絵図集成』（昭和58年・同61年解説／索引）、『改定 九度山町史 史料編』（平成15年）等、和歌山県立博物館編集の『弘法大師と高野山参詣』（平成27年）、高野山大学図書館編集の『高野山大学所蔵 高野山古絵図集成』（2020年）を基とし、明治41発行の陸軍省陸地側部地図 5 万分の 1 地図、紀伊国名所図会の絵画史料等（その他大量に頒布された版本による古絵図類を除く）から「川湊施設」と「町並の広がりとその建築的な表現」について考察してみる。

これらの要件に合う史料について、管見の内では中世にまで遡るものは一切なく江戸時代前期頃から近代の初めにかかる古絵図類は散見されるが、建築としての構造まで読み取れる古絵図は非常に少ない。

(1) 高野山東京別院の古絵図

史料① 高野山東京別院の古絵図 江戸時代 前期から中期

この古絵図は木製の枠を井桁に組み黒漆を塗り要所に鍍金の飾り金具を打ち付けた枠に装丁された豪華な紙本の絵馬で、政所と紀の川から高野山までを簡略化して描かれ画面の右上に「高野山政所慈尊院図」と注記し、山上の3枚とで構成される史料である。画面の劣化・剥落が相当にみられ細部が不鮮明になっており相当期間外部で掲示されていたとみられる。

古絵図史料の内では最も古い史料で、『高野山古絵図集成 本編』においては江戸時代中期としているが、昭和61年の『同 解説／索引』においては江戸時代前期から中期の製作になるものと修正している。

紀の川左岸に位置し、支流丹生川との合流部の上流（真田淵カ）には大規模な「雁木」と呼ばれる石造の階段状遺構が描かれている。この雁木構造は5段以上で延長は数十mを超すとみられる大規模で両端には簷桁を備えた本格的な構造で、紀の川の水位の変動に対しても有効に川舟が横付けできる構造である。

古絵図調査の結果「雁木構造」の川湊施設はこの事例が唯一のものであり、他の事例は結晶片岩岩盤の川岸から扇形や直線状に波止を構築した構造であり、更に湊に近接して満帆で海風を利用して紀の川を遡る大きな舟や係留された舟を描いている。

集落はこの雁木遺構の南側の高台に位置し、不鮮明であるが一直線状に約10棟の町屋を連続して描いている。建物は切妻造と読み取れるものが中



史料①-1



史料①-2 拡大

心で屋根葺き材料はその表現方法から見て板葺と瓦葺がほぼ同数に混在しているようであるが、建築的な細部は描かれておらず不鮮明な事項が多いものの、管見の内では川湊と集落を描いた史料のなかで最も古い史料で、地形的な環境も良く描画されている。

慈尊院の川湊は、天文9年（1450）の紀の川の大洪水により壊滅的な被害を受けたとされ、この史料は江戸時代前期まで遡るともされており、これ以後に描かれている舟戸の川湊のなかでは唯一「雁木構造」による施設である。天文9年（1540）に慈尊院川湊施設は壊滅的な被害を被ったとされ、それまでは慈尊院の川湊は高野山を実質的に支えていたと考えられることからこの事態の解決は緊急の課題であったことは間違いがなく、被害後直ちに新しい川湊の新設が急務であったと考えられよう。

(2) 高野山西南院の古絵図

史料② 高野山西南院の古絵図 江戸時代後期（寛保元年[1741]から寛政6年[1794]頃）

紀の川沿いから高野山の一部までを描いた古絵図で、紀の川の『横渡シ』・『九度山』の名称を明記し集落とこれらを東西に縦貫する「槇尾道」を描き、集落の東端の外れに所在する総産土神社を『槇山』と示しその手前に槇尾道を跨ぐ石造の大きな鳥居を明示し、その南の先には『梨の木峠』を越え推出集落の手前で支流である『丹生川』にいたる。

丹生川に架かる『赤瀬橋』を渡り不動谷川の右岸を通り『推出』の集落に至り、『弁天（社）』と地藏寺を経て真っ直ぐ南へ長坂川を遡って高野町神谷の『神矢辻』（『地藏堂』）に至るルートを描き、ここで不動道と合流して高野山を目指すように描かれている。

高野町神谷において中世から近世・近代初期にかけて最も利用されてきた「高野七口」の一つである「不動道」に合流して、高野山を目指した様子を詳細に描いている。他の史料と同様に「不動

道」とこの「榎尾道」はほぼ同等の幅員に描き分け、その周りの景観も丁寧に画いていることからこの榎尾道の重要性を示唆していると考えられる。

この九度山集落の中央には慈尊院から続く榎尾道が幅広く東西に走りその左右に集落を描き、その両側には密集した町屋の建物を28棟を描き集落を表現しているが、簡略的に描き全て同じ向き・切妻造風・屋根葺き材料も不明であり、集落の建築的な特徴は判読できない。

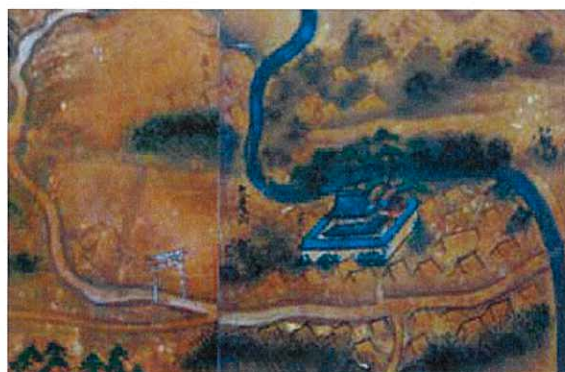
「明神辻」より東の「榎尾山通」には集落の描画はなく、南への「雨の森通」についてはそのものの描画はない。

舟戸の川湊施設は全く描かれていないが、真田淵には「横渡シ」との注記と横渡の情景や地形的な特徴は良く描かれている。

この古絵図には、九度山集落の南東部に『地藏堂』・地主神・真田の松等が描かれており、この地藏堂は現在の善名稱院（真田庵）に当たりその創建は寛保元年（1741）であることが明らかであることから、この古絵図の製作年代は寛保元年（1741）以降と考えられる。更に『古絵図集成



史料②-1 部分



史料②-2 拡大 九度山の町並

本編』では江戸時代中期とし、『同 解説 索引』昭和63年、においては江戸時代後期に修正しているが、推出の地藏寺文書の「赤瀬橋」改修の古記録である寛政6年（1794）にある「一本の投げ渡し」の橋を改造したことが記されていることから、上記の寛保元年（1741）から寛政6年（1794）までの間に製作されたものと考えられる。

(3) 九度山区の古絵図

史料③ 九度山区の古絵図 明和3年（1766）

江戸時代

九度山区が所蔵する史料で明和3年（1766）の記年銘がある史料で現在この史料の所在は不明で実見しておらず、町史・史料篇の口絵カラー写真が掲載されているが記載の文字までは判読できない。

九度山地区の中心地域となる「紀の川」とその支流である「丹生川」に囲まれた結晶片岩が大きく露頭する地域で、最大で東西約1.0km・南北約0.4kmの範囲であるが「明神辻」より東の「榎尾山通」と南の「雨の森通」においては写真の図幅外となっており、実物の絵図にはどの範囲まで描かれているのかは不明である。

北は紀の川の真田淵に面し結晶片岩が崖状に立ち上がり（現況の最大の比高差は約30m）、南と西は岩盤でその先は緩やかな河岸段丘となり更にその先は丹生川が削り出し蛇行する崖地の結晶片岩に囲まれた地域を描いている。この図幅は「明神辻」辺りまで印刷されているのみでその東及び南方は図幅外となっており、その集落の存在は不明である。

この絵図に描かれた範囲内では、四周の崖地を外周として道路と隣接するそれぞれの敷地で区画された195箇所の敷地についてその概形を囲みその内側に地番・面積・石高・所有者を明記しているとされ、町場の地形環境を非常に巧く表現している。

その南北の横断面は蒲鉾形を呈しその中央分部の最も高い部分が背骨状に貫通しここを中心道路

となる「槇尾道」(中通)が東西に通る、更にその南方には細長く続く低位置には桃園地域の中程から南西方向へ大きく湾曲しながら善名僞院(真田庵)の北を通過して、その西端は「丹生橋」に至る「南通」である。中通よりは細めの道として描かれ、その南と北側には縦横に細い中・小路が入り込んだ地割図として描いており現状地形とほぼ合致するが、建物は全く描かれていない。

この図における特異な法面の表記については、岩盤の傾斜面は天端と下端を単線で表記し黄緑色の逆V字型紋(現在でも竹が大いに繁茂しておりこの表記か)で表現し、石垣積みは天端と下端を単線で表記しその間を小さな丸状のマークで埋めるが、大半はこの密な小丸を省略し淡い黄緑色に塗りつぶしている。

紀の川左岸に広がる真田淵の下流側には扇状に突出した低い川湊の施設を描いている。汀部分は2本線で立ち上がる波止を描きその上面は小さな点で石畳を表現し、荷揚げ場としていたようである。

現在でも渇水期においては川湊施設の基礎としていた岩盤が大きく(長さ約35m、総幅約15m、2条に分岐)露頭しているのが確認でき、この露頭の岩盤を利用して川湊を築造したことは明らかであり非常に巧く描かれた川湊施設の存在を想定することができる。この川湊施設から南方の町場へは急傾斜で約20~25mの高台にある屋敷地群に繋がる大路が描かれているが、急傾斜であるためS字状の急峻な通路として繋ぎ高低差を処置している。

ここに描かれた屋敷地の密度は非常に高く、中央部の背骨位置筋に中通(槇尾道)を東西に幅広く描き、その縦横に細い小路と路地を張り巡らせ、その地割りには都市計画的な要素が大きくみられその様は周りの寒村とは全く異なり、正に町場の地割り景観を呈しているが、建物類は一切描かれていない。

しかし、番地毎の各地割りが描かれているとさ

れ、町場の大きさや広がり等がほぼ現在の地形によく合致し、現地に遺されている結晶片岩の露頭部分を基盤として扇形の湊施設が造成されてきたと考えられ、その変遷や復原の基礎資料となり得るもので貴重な史料である。

この図はこの地元で製作されここで利用しながら必要に応じて付箋を貼付け修正を繰り返し、現実に使用されながら現在にまで伝えられてきた史料でもっとも正確な古絵図であり、ここに内蔵されている価値は計り知れない貴重なものである。

この史料に関する歴史的・史料的な事項については町史において一部考察されているが、この史料に内蔵された多岐にわたる研究は進んでおらず、今後の各種分野からの研究が待たれる。

町史・通史編(457頁)において『船戸に川の中へ突き出した構造物が描かれている(中略)元禄期以降に船戸の機能を強化するために造られたと思われる。これに伴って道路や橋も整備され、高野山までの距離の短い九度山村が流通の中心的な存在として発展していった。』と記しているが、



史料③-1



史料③-2 拡大

前述の通り筆者は天文9年の大洪水により慈尊院の川湊が壊滅したと考えられることから高野山への物資の輸送を滞ることはできないはずであり、直ちにこの舟戸の川湊は整備されはじめてきたと考えるべきであろう。

(4) 高野山持明院の古絵図

史料④ 高野山持明院の古絵図 江戸時代後期

史料②・⑤とほぼ同様の範囲で紀の川から高野山までを対象に、槇尾道については町石道・不動道と同様な道幅に描き別けて、通行人や荷物を運搬する情景まで丁寧に描いている。紀の川の舟運については、大型の川舟・荷物を満載した川舟の三反帆に海風を満帆に受けながら船頭が腰まで川水に浸かるとともに川岸を3人の夫役が綱を引っ張りながら舟を遡らせ・川下りの乗船・横渡・筏等と関係する人物までも巧く描いている。

町並については最も細部まで詳しく描かれ、建築の細部構造までも判明するように描き別けられている貴重な著色の古絵図である。

川湊施設と町並の接続部には大きな高低差があるため敷地境には大きな石垣を築いたり、S字状の傾斜路を造り対応し最下段の町屋は平入りとし高低差を解消するため懸造に工夫している。その下方の道際には小祠（切妻造、板葺）が祀られ、この道や施設は相当に大きく利用していたことをうかがわせている。

『真田淵』下手には「舟戸の川湊施設」とみられる広い平らな敷地を造り出し、一人の人物と5個の白い荷物を置いている。右端には中心に穴を穿った球形・左に低い背の直方体が2基・左端に一端に丸みをもった直方体の荷物が配置されている。この図のみからでは詳細は判定しがたいが次の史料⑤と比べてみると、明らかにこの荷物も石造五輪塔の部材であることが判明するが、運搬道具類は見当たらない。

荷物の脇には黒い衣装（袈裟?）を着た人物が腰を降ろし、川湊の下流側には荷物を降ろした大きな川舟が2艘繋ぎ止められている情景を描いて

おり、舟運・川湊の情景を巧く描いている。

紀の川と支流である丹生川に囲まれた高い結晶片岩の露頭部分と石垣により雑壇状に造成された宅地に営まれた集落を巧く描画し、中心街路（槇尾道・中通）の左右に合計46棟の町並を建築的な要素を巧みに描き分けている。中心街路である東西に通る「中通」・川湊からの大路・九度山から梨の木峠を越え椎出・神谷辻で京大坂道（不動道）で合流し高野山に向かうこの『槇尾道』は、不動道や町石道とほぼ同じ幅員に描き、途中の集落や地形も巧みに描かれ、この槇尾道の重要な位置付けを具体的に描画しておりその重要性を想定することができる。

槇尾道と川湊への街路に描かれた46棟の町並について屋根形式から見ると入母屋造35棟（76.1%、そのうち瓦葺20棟、茅葺25棟）、切妻造11棟（23.9%、うち10棟は瓦葺、1棟は板葺）、槇尾道に面した町屋の23棟のうち22棟は平入・川湊への分岐点に面する土蔵のみは唯一妻入りとしている。

屋根葺材料の区分については、瓦葺（本瓦と桧瓦の判別は不可能）建物は20棟（全体のうち43.5%・入母屋造は10棟・切妻造も10棟）、茅葺き建物は25棟、板葺は1棟（S字状上り坂の小祠）に分類できる。瓦葺きが約半数近くを占めている状況についてはこの地域の経済的な裕福さを史料⑤とともに想定することが可能である。

46棟の町屋のうち庇を付ける建物は17棟があり（そのうち主体部が瓦葺きで庇も瓦葺きが7棟で41.2%、主体部が茅葺きで庇が瓦葺きのもの5棟で29.4%、主体部が茅葺きで庇も茅葺きのもの5棟、29.4%である。

描かれた町屋のうち外観からみて、切妻造・瓦葺・軒の出が小さく・漆喰壁の建物7棟は土蔵とみられ、全体の15.2%も占める状況から、川湊と槇尾道の交通の要衝であったことにより土蔵が特に多く建てられ大いに栄えたことを査証する一つであると考えられよう。

この土蔵の占める比率については史料⑤におい

では7棟15.6%とほぼ合致する結果となり、当時の状況を的確に描画したと考えてもよからう。

これらの古絵図類はすべて、紀の川右岸の上空から南方を向いて町並を俯瞰した情景に描かれ、町屋のうち槇尾道（中通）の南側（北面する）に位置する町屋10棟のうち主体部は瓦葺きで正面にミセ構えの瓦葺きの庇をつけるのもの3棟、主体部の瓦葺きをそのまま葺降ろして庇とするもの2棟、主体部は茅葺で庇は瓦葺きのもの2棟、主体部は茅葺きで庇は付けなくとも正面の壁面より半間通りを開放とし商家の店構えとしたもの2棟等々商家を表現し町屋を連続させており、当時の



史料④-1 部分



史料④-2 部分



史料④-3 拡大

経済的な賑わいをも想定させる史料である。

東方部分に描かれた大型の町屋は切妻造の主体部に4面に庇を巡らせた本格的なもので、庇の上部は漆喰壁とし正面と側面には虫籠窓を設け、完全なツシ2階建に描くとともに、背面に切妻造・2階建・瓦葺の土蔵を描いている。

川湊施設と町並の接続部には大きな高低差があるため敷地境には大きな石垣を築いたり、S字状の傾斜路を造って対応し最下段の町屋は平入りとし高低差を解消するため懸造風に工夫している。その下方の道際には小祠が祀られ、この道や施設は相当に大きく利用していたことをうかがわせている。

「明神社」から東方への「槇尾山通」には集落は描かれておらず、南方への「雨の森通」は小径で描かれるが人家はほとんど描かれていない。

なお、この絵図は江戸時代後期の製作とされているが、町中には寛保元年（1741）の創建であることが明らかな善名僊院（地蔵堂、真田庵）はまだ描かれておらず、町並の建築的事項は詳しく描かれていることや他の地形的環境や目印となる社寺については詳しく描かれていることからみて、この古絵図は善名僊院創立以前である元文5年（1740）以前の製作になると考えられる。

(5) 横浜海照寺の古絵図

史料⑤ 横浜海照寺の古絵図 江戸時代後期

前の史料④とほぼ同様の範囲で紀の川から高野山までを描いた古絵図で、史料④に次いで非常に細部まで詳しく描かれているが、舟運に関わる以外の人物はほとんど描かれていない。紀の川とその支流である丹生川に囲まれた高い結晶片岩の露頭台地に営まれた集落を巧く淡彩で描画し、中心街路である槇尾道（中通）・川湊から槇尾道まで・更に学文路への「慈尊院道」をも同等の道幅に描いている。槇尾道は町石道や不動道と同様に同じ太い幅員に描いており、このことから同様に槇尾道の重要性を想定することができる。

『真田淵』の下手に位置して「舟戸の川湊施設」が描かれている。岩盤の崖下に石畳状に敷き並べた荷揚げ場を構築し、水際には杭状のものを打ち込み護岸としたり石畳際には手摺りのような設備を描いている。

この荷揚げ場には白く塗られた各種資材が敷き並べられており、よく観ると高野山奥の院に建立しようとする石造五輪塔の部材である。近くに描かれた人物と比較すると巨大な寸法で向かって左の手前に中央部分に貫通孔のある水輪・奥に貫通孔のある火輪・その右奥に1材に加工された空輪と風輪・手前中央に四角い貫通孔のある台座・右手には貫通孔のある地輪が荷揚げされた情景が描かれている。

この古絵図においては五輪塔の部材のみでなく、唯一の事例として地輪と台座の上にこの石造部材を高野山まで運び上げる一組の道具仕立てが巧く描かれている。その内訳は部材の貫通孔に通す長く太い「心棒」とその前後に直交してそれぞれ2本の細い「担い棒」を描いており、この各担い棒の左右にはそれぞれに2から3人が担ぐようであり「16人持ち」ないしは「24人持ち」とみられる規模の運搬道具立てまでもが描かれている。

このため五輪塔1基の部材を担ぎ上げるには、火輪・水輪・地輪・台座用の各部材としてこの道具立てを4組と空輪と風輪が結合した部材用のため1組の計5組の布陣が必要であった。更にこれ以外に交代要員・食料や飲み水運搬の要員・工作用等要員で1式として最低でもほぼ100人～150人以上を要する非常に大がかりな布陣が必要であったと考えられ、高野山まで運搬するには非常に高額な経費を要したことが知られる。(本稿第2章3節を参照)

町史 通史編(457頁)には「地場産業としての供養塔の運搬」・「舟戸と浜の補完」の項目において「中橋家文書」を引いて、文化7年(1810)の『長州大主大膳太夫石塔指図と才積』とする地輪幅3尺5寸の大きさを有する供養費の運搬につい

て、各種石材の寸法・重量・運搬人数・運び賃・運賃の合計等の詳しい明細を資料を載せており、非常に高額な経費を示している。

更に大きな大名の墓所となると、何段もの基壇・蓮弁・華瓶・華立・線香立・鳥居・四十九院・参道・周りの石敷き等々を設けると共に、代々の藩主・その妻子・陪臣等の墓石を備えた部材を必要とする場合があり、奥の院には非常に大規模な墓域も散見されることからそれに要する経費は計り知れない膨大なものとなる大土木工事であったろう。

また、丹生川(『入江川』と明示)との合流点の左岸の砂利浜には、高野山の寺領から運ばれてきたのであろう年貢米の一部として6段で計21俵が積まれた状況を描いており、上記の川湊の陸揚げ施設が別途使用されている場合においては、供養碑部材より運搬しやすい米の陸揚げについてはこの丹生川左岸の砂利浜をも臨時の荷揚げ場として利用されていたことが判明する。

これらの荷物の運搬ルートについて町史においては、政所の別当家が中橋家であり、紀伊国名所図会に描かれた『72人持ち仕立』の絵図等からかほとんどすべては嵯峨浜で荷揚げし、町石道を経て高野山へ持ち上げられてきたと記しているが、少なくとも江戸時代後期においてはこのように大・中規模の石塔にあっては慈尊院の川湊より機能的に効率・便利であったこの九度山の『舟戸』の川湊を利用し、槇尾道を通して高野山へ運ばれたであろうことが十二分に考えられる。

紀の川と支流である丹生川に囲まれた高い結晶片岩の露頭部と石積みにより雛壇状に造成された敷地群に営まれた集落を巧く描画し、中通(槇尾道)を中心に合計45棟の町並を建築的な要素も描き別けた絵画史料である。「中通」に面した町屋の23棟のうち、20棟は連続した平入で、妻入りは分散した3棟のみで平入りを基本とした町並である。

描かれた45棟の町並について、屋根形式からみ

ると入母屋造32棟（全体の71.1%、うち瓦葺は8棟・茅葺24棟）、寄棟造は1棟（2.2%、瓦葺）、切妻造12棟（26.7%）となる。屋根葺材料からみると、瓦葺建物（本瓦葺と桟瓦葺きの区分は不可能）は20棟（全体のうち44.4%）、茅葺建物は24棟（全体の53.3%）、板葺は1棟（S字状上り坂の小祠2.2%）に分類できる。切妻造・瓦葺・漆喰壁・軒の出が少ない建物は史料④よりは不鮮明であるが7棟描かれ全体の形状や描き方から見て土蔵と考えられ、その比率は15.6%となり、土蔵の占める割合は非常に多い町並である。

これらのことから、瓦葺が約半数近くを占め・



史料⑤-1 部分



史料⑤-2



史料⑤-3 左上には明神社も描かれている

土蔵の比率が高いという状況からみてこの地域の経済的な裕福さを想定することが可能であり、川湊と榎尾道の交通の要衝であったことにより土蔵が特に多く建てられ大いに栄えたことを査証する一つであると考えられよう。

瓦葺き建物のうち、入母屋造のもの8棟・切妻造のもの12棟を描いている。切妻造の建物は入母屋造より規模が小さく細長く描きしかも壁には漆喰を塗っているものは7棟もあり、これは一般的に土蔵を描き分けしていると観られる。集落の全建物45棟のうち土蔵7棟の比率は11.6%を占めることから、先に述べたように川湊の集落として積み荷を保管する施設であることが明らかであろう。このように九度山地区は、次項でその詳細を述べるように紀の川の川湊の集落として栄え、瓦葺き建物の比率は44.4%と高い比率である。

「明神社」から東方への「榎尾山通」には集落は描かれておらず、南方への「雨の森通」は小径で描かれるが人家はほとんど描かれていない。

この古絵図も史料④と同様に、描かれている内容から見て元文5年（1740）[真田庵の創建]以前



史料⑤-4 右下には川原に積まれた俵群まで描かれている



史料⑤-5 石材の上には運搬道具が描かれている

の製作になると考えられる。

このように舟戸を利用した状況を具体的に視覚的に示す古絵図が相当数確認できる状況になってきたが、このことを更に証明できる根本史料の調査と研究が待たれる。

(6) 天野丹生都比売神社の古絵図

史料⑥ 天野丹生都比売神社の古絵図 天野社周辺絵図 江戸時代19世紀

紀の川左岸の「高野山領」を描いた古絵図で、紀の川沿いから高野山全体まで広範な範囲を描き、画面東端に「九度山村」を描いている。村を東西に榎尾道が貫ぬき南方の「椎出村」を経て神谷辻で不動坂道と合流し高野山に通じている状況を描いている。

舟戸の川湊施設は描かれていないが、紀の川沿いの崖地と支流の丹生川は表示されている。自然地形や距離的にも大きくデフォルメされ詳細な情景は省略されしかも遠景的な表現に留まっているため、九度山地区の榎尾道の両側には12軒の住宅



史料⑥-1 部分



史料⑥-2 拡大

が描かれているが建築的構造は全て省略されているが、街道に沿って集落が広がっている状況は読み取ることができる。

(7) 紀伊国名所図会の古絵図

史料⑦-1「紀伊国名所図会」巻之三 『入郷九度山』の図 (57頁参照)

紀の川右岸から俯瞰した図で、町中の中央に榎尾道が東西に走り、集落中央部の南には「地藏堂」(善名稱院)を中心に町場を形成している。西の「入江(入郷)村」から丹生川を土橋でわたり「九度山村」に入り、榎尾道の両側には町屋が連続して続き、東端の高台には「明神(社)」と「榎尾山」・「宇田峯」が描かれ、梨の木峠越えの街道には「高野山道」と注記している。

九度山集落のうち社寺(地藏堂、遍照寺、観音寺、我覚寺、明神社)の建物を除くと51棟が描かれ、瓦葺が12棟(23.5%)・茅葺が26棟(51.0%)で、榎尾道の両側に軒を接した町屋は33棟(64.7%)で瓦葺が7棟(24.2%)・茅葺26棟(78.8%)で全て平入りに描いている。

榎尾道の南側に建てられた(北向き)16棟のうち主体部が瓦葺で瓦の庇付が1棟・板葺の庇付が3棟、主体部が茅葺のものが12棟で板葺の庇付が1棟となっているが、庇がなくとも半間通りをミセ構え風に描き分け、町場の雰囲気を示している。

この史料は墨の刷り本であるため土蔵と判断できる情報は少なく、川湊の施設及び「明神社」から南方への「雨の森通」は描かれていない。

史料⑦-2「紀伊国名所図会」巻之三 『九度山地蔵堂 真田の旧跡』

南東方向からみた俯瞰図で、地藏堂(善名稱院)とその周辺のみを描いている。社寺関係の建物を除くと27棟が描かれ全て入母屋造・茅葺きという住宅風のみで、その密度も低く町屋としての表現は見られない。

(8) 大日本帝国陸地測量部の地図

史料⑧ 大日本帝国陸地測量部 「五万分の一測

図 高野山」 明治41年(1908)測図

近代的な技法になる地図であり、近代交通機関である鉄道が描かれている。この地図は5万分の1の縮尺で前述のような町並の建築的な特徴の表現はないが、その地形的な環境・広がり・ルートの変遷について想定することが可能となってきた。

これまでは徒歩による移動であり、京・大坂方面からは橋本市の「学文路」から九度山町の「河根」・高野町の「神谷」を経て南の高野山を目指す『不動道』が最も一般的であったが、近代の新しい交通機関として明治34年(1901)に和歌山から五条までの「紀和鉄道」が開通し、最寄りの駅として「名倉駅」(現高野口駅)が設置され、これに伴い参詣ルートも大きく変化してきた。

名倉駅からは徒歩で南下し紀の川を越えて九度山の町中で榎尾道と合流し高野山を目指すこととなるが、「紀の川一水の歴史街道―(平成8年)」192頁に出典は明示されていないが「明治35年の地形図」とされる地図(地図の表記方法から見て、陸地測量部の地図とみられる)においては既にこの地点には「橋」が表記されている。

しかし、町史においては明治37年(1904)に「賃取橋」(有料の橋)として「九度山橋」が竣工しているようであり、紀和鉄道の開通時においてはまだ渡し船により渡河していたこととなり、近代交通機関の変革時においては相当混乱していたとみられる。

この渡河後は榎尾道であった「中通」を東進し「明神辻」からは江戸時代までの「梨の木峠」を越える山道ではなく、「明神辻」で南方へ別かれて丹生川右岸の「雨の森通」へ曲がり南進することとなる。椎出に入ってから旧来の梨の木峠から下ってきた道(榎尾道)と合流し、「赤瀬橋」を越えこれ以降は旧来の榎尾道を利用するという新しいルートが大きく描かれている。

この丹生川沿いの道(雨の森通)は勾配が非常に緩く歩きやすい道として、高野山への参詣ルートとして大いに利用されることとなってきたようである。この区間の道は地図の凡例によると「県道及之ニ準スルモノ」として重要な道として表記されており、旧来の梨の木峠越えの榎尾道は「一間以上 里道」として表わされ道路としての役割が大きく変化しており、更にこの新しい道は現在の国道370号線に引き継がれてくる。

この区間の全域は、周りの山々は非常に急傾斜で丹生川の急流が浸蝕した深く蛇行する溪谷に沿って通っており、固い結晶片岩の岩盤を削平して道路を造成せざるを得ないという難工事であったろう。この工事は単に高野参詣道の新しいバイパス道としてのみで施工されたのではなく、次のように高野国有林関連の森林軌道布設への各種の先行工事があったようである。

金剛峯寺の山林は明治6年(1873)に大部分が国有林に編入され、明治19年(1886)にその伐採がはじまり紀の川で筏を組んで下流へ流すため「安田島」に土場(貯木場)を設けたが、椎出で一旦集積された木材は旧来からの榎尾道である「梨の木峠」を越えることができないため、丹生川右岸の崖地に緩い勾配の「木馬道」を設けその跡地に森林軌道を布設し始めてきたようである。

更に明治39年(1906)に新しい土場を「入郷」に造ることとなり、森林軌道は丹生川の左岸に変更して布設され、国有林の伐採・運搬が大いにすすんできた。

このような経緯の中でこの右岸の森林鉄道敷の跡地を利用した榎尾道のバイパスが主流となり大いに発展してきたが、大正14年(1925)には南海電気鉄道の高野線が九度山町椎出まで延伸し『高野下駅』が開設され、ここからは直接旧来の「榎尾道」を利用して神谷を経て高野山を目指すこととなってきた。

これにより大阪から直接電車により椎出まで来ることができることとなり、紀和鉄道の「高野